

南半球便り(その 19) : 「2 プラス 2」

6月22日

外交の世界には、色々な専門用語があります。英語でも役所用語等を指して「Gobbledygook(意味不明の意)」と揶揄する表現があるくらいなので、日本だけに限った話ではありません。使っている人間だけが分かっている、乃至は分かった気になっている用語が多い中、「2 プラス 2」はまだ、ましかもしれません。

1. 日豪「2 プラス 2」

要は、「外相・防衛相共同会合」。日豪両国の外務大臣と防衛（国防）大臣が一同に会し、4人そろって会議を行います。日豪の「2 プラス 2」の歴史は古く、米国に次いで、2007年から開始され、今年9日に行われた会合で9回目になります。

ちなみに、日本は豪州、米国の他には、英、仏、独、印、インドネシア、露と「2 プラス 2」を実施してきています。外交を司る外務大臣だけではなく、国防を担当する防衛大臣が一緒に参加することによって、両国が共有する安全保障上の問題を広範かつ戦略的に議論し、もって、二国間の協力をいっそう円滑かつ強固にする効用があります。



日豪「2 プラス 2」の開催（出典：外務省）

2. 歴史的な内容

本日あえて、この南半球便りで固い題材を取り上げるのは、私の目から見ても、今回の会合の実りが非常に大きかったからです。長年外交官生活をしていると、数々の「ありきたり」

の文書を目にするものですが、時に、「おお。ここまで来たか。」との感慨を持つ内容があります。まさに今回の共同声明 ([ここ](#)でご覧いただけます。) は、そうしたものなので、以下私なりの独断と偏見を交えて解説申し上げます。

なお、ここまで充実した内容の共同声明が対面の会合の結果ではなく、テレビ会議の結果として提示されたことは、日豪関係の高い成熟度を物語っているのではないのでしょうか？

3. インド太平洋の中の日豪関係

日本とオーストラリアとの二国間で作成した文書なので、当然に両国間の協力が主眼になるわけですが、今回の文書では、冒頭にインド太平洋地域での協力という大きなテーマを打ち出しています。言うなれば、日豪にとどまらない広い地平線、水平線を提示しています。

すなわち、インド太平洋地域への米国の関与の重大性、ASEAN諸国・太平洋島嶼国との協力の重要性、EU、欧州諸国の関心の増大と関与を歓迎するとの表現です。

「自由で開かれたインド太平洋」の実現に向けて、日豪両国が二国間の協力や日米豪印といった枠組みを通じて積極的な役割を果たしていくとの姿勢が前面に出ています。

4. 「豪州は一人ではない」

共同声明の次に大きなポイントは、貿易相手国との関係で多大な困難を抱えてきた豪州に対して、力強いメッセージを確認しました。すなわち、「我々は、ルールに基づく国際体制を損なう、経済的手段による威圧や安定を損なう行動に反対することにコミットする」「我々は、威圧的な経済的慣行に対して懸念を表明し、自由で、開かれ、包摂的で、繁栄したインド太平洋を支持するため、経済的課題を解決するためにパートナーと協力する」というメッセージです。

「豪州は一人でない。」ことが、2プラス2という高いレベルで文書によっても確認されたことに大きな意義があります。

5. 東シナ海・南シナ海での協力

力と威圧による現状変更の試みが続いてきたという意味では、南シナ海も東シナ海も共通です。ただし、従来は、日豪間の協力は、南シナ海での航行の自由、上空飛行の自由を守るべく、共同巡航や共同訓練を行うことが多かった一方、東シナ海では、国連安全保障理事会の決議により禁止されている北朝鮮船舶とのいわゆる「瀬取り」を含む違法な海上での活動に対して警戒監視活動を行うことが主となってきた感があります。

これに対し、今回の共同声明では、南シナ海のみならず、東シナ海でも日豪が協力して行動していくことの必要性和重要性が強調されています。この背景には、台湾海峡の平和と安全

が、日豪両国のみならず、インド太平洋域内の諸国、さらには米国や EU 諸国といった国際社会共通の深い懸念事項となってきた経緯があります。

6. 具体的・実質的な協力

上記に列記した大きな絵柄の話と相まって、今回の特徴は、地に足のついた具体的・実質的な協力についても、踏み込んだ合意がされていることです。

自衛隊と豪軍との間の相互運用性の向上。この関連で、空中給油のような高度な訓練を行うことまで言及されています。



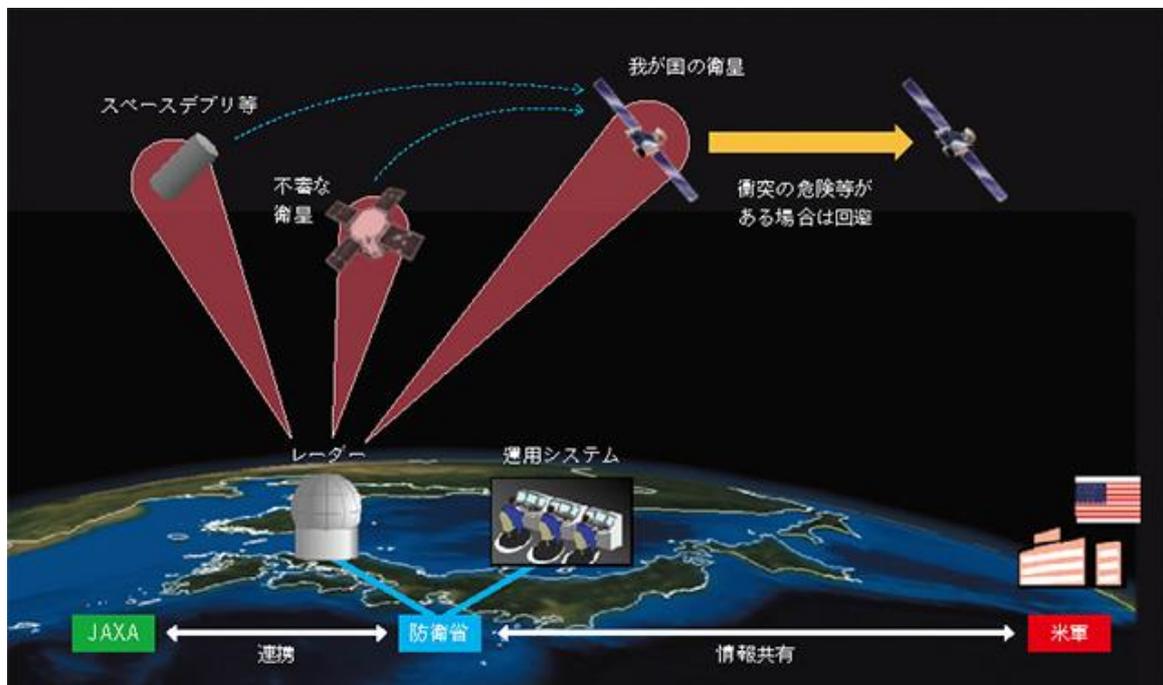
航空自衛隊 KC-767 による空中給油（出典：防衛省）

自衛隊法第 95 条の 2 に定められている、いわゆる「武器等の防護」の対象に豪軍が入ることの明記。豪軍の要請があつて法律上の要件を満たす場合には、自衛隊が豪軍の艦船等のアセットを守る時代に入ってきたのです。



海上自衛隊「きりさめ」と豪フリゲート艦「アランタ」(南シナ海、2020年10月)

その他、宇宙状況監視（SSA）も注目されます。自衛隊は2022年度までにSSA体制を構築する計画で、この分野での豪軍との情報共有等の協力が視野に入ってきています。冷戦時代より、豪州大陸で捕捉される通信情報の重要性が玄人の間で夙に指摘されてきたことを想起された方もおられるのではないのでしょうか？



宇宙領域における航空自衛隊の能力強化（出典：防衛省）

7. 最後に

長年日豪の安全保障協力を携わってきた方々から、「ここまで来たか。」との感慨が聞こえてきそうな展開です。

実は、先日、豪州の国会議員一行を大使公邸にお招きして意見交換をした際、私から申し上げたことがあります。

「確かに日豪両国は、第二次大戦中には干戈を交えるという不幸な時代があった。他方、もっと長い物差しを取れば、第一次大戦では同じ側で闘った。例えば、日本の巡洋戦艦『伊吹』は豪州大陸からインド洋を越えて派遣される豪州兵の洋上での警護に当たった。第二次大戦後は、長らく冷戦を共に闘った。そしてイラク（での平和維持活動）では、協力し合った。」



巡洋戦艦「伊吹」(出典：防衛省)

ますますもって協力の真価が問われる時代を迎えています。遠く離れながらもインド太平洋の海洋によって繋がれている日豪。両国の先達の犠牲と献身を正面から受け止めつつ、さらに緊密な協力関係を築き上げていきたいと思えます。

山上信吾